



# はじめに

今からおよそ100年前、「スペインかぜ」とよばれたインフルエンザウイルスによる感染症のパンデミックが起きました（→第1巻）。その感染者数は、世界全体でおよそ6億人でした。この数字は当時の世界人口の約3分の1に当たります。

今回の新型コロナウイルス感染症がそれと同じように感染拡大していくとすれば、現在の世界人口約77億人から考えると、途方もない数の人たちが感染することになります。ぼくはそんなことを考えながら、シリーズの第1期3冊目の本の印刷があがってくるのを待つとともに、第2期の執筆・編集をはじめていました。

そのころでした。日本国内の感染者数が10万人をこえ、世界全体では4500万人以上となり（2020年10月31日）、感染の拡大が「第3波」といわれる大きな波をえがきはじめていたのは……。

でも、大きな不安が世界をおおいはじめる一方で、ワクチン開発が成功したという報道も世界から伝わってくるようになりました。人類は、なんとか感染拡大をくい止めようとしています。それでも、今回の新型コロナウイルス感染症をどのように克服できるか、まだわかりません。これからも、まだまだむずかしい、きびしい状況が起きてくるかもしれません。

では、ぼくたちはどうすればいいのでしょうか？

第1期で述べた「正しくこわがる」はいうまでもありませんが、第2期では、それに加えて「正しい知識を身につけて疫病退散（感染症を追いはらうこと）に努力する」を目標としたい！（第2期は事の重大さから2021年3月に一挙刊行としました）

- 第1期 ① 人類の歴史から考える！
- ② 人類の知恵と勇気を見よう！
- ③ この症状は新型コロナ？
- 第2期 ④ 「疫病」と日本人
- ⑤ 感染症に国境なし
- ⑥ 感染症との共存とは？

「疫病」と聞くと、なんだか怖い病気、うつたらたいへんなことになる病気のように感じる人も多いのではないのでしょうか。とくにお年寄り、ご自分が若いころに日本でも赤痢やコレラがはやったため、疫病は本当に怖いものだと思います。でも、疫病も、こわがってばかりではどうしようもありません。なんととっても、正しい知識をもつことが大切です。

この本では、古代から（スペインかぜが世界をおそった）1918年ごろまでの「疫病」と日本人の関係をくわしく見ていながら、「正しくこわがるとは？」「正しい知識とは？」を、みなさんといっしょに考えていきます。でも、「正しい知識」とは、医学や科学の知識ばかりではありません。どういうことでしょうか？ それも本文を読んでください。

# もくじ

## ① 日本の疫病の歴史（1） 4

- もっとも古い結核の痕跡 ・ 水田稲作の発展と疫病の発生
- 古代で大流行を起こした天然痘 ・ 遣新羅使が運んだ疫病 ・ 医師の養成
- マラリアもありふれた病気だった ・ 鎌倉・室町・戦国時代の疫病
- 江戸時代の疫病 ・ 種痘が広まる ・ 「命定め」といわれたはしか
- はやりかぜとは？ ・ 「コロリ」とおそれられたコレラ

## ● 疫病と日本人のかかわり 13

## ② 日本の疫病の歴史（2） 16

- 西洋医学の幕明け ・ 本格的な近代医学教育のはじまり ・ 種痘所から医学所へ
- 明治時代になると ・ 明治・大正時代の医学略史

## ● 感染症に立ちむかった3人の日本人医師 20

## ③ 近代化と日本の医学 23

- 病院と医学校が全国に

## ④ 日本のスペインかぜ 24

- スペインかぜ日本に上陸 ・ スペインかぜの拡大 ・ スペインかぜの正体
- 「流行性感冒予防心得」 ・ スペインかぜの収束

## ● 写真で見る100年前と現代 28

## ⑤ 日本の疫病の歴史から学ぶべきこと 29

- 令和のアマビエ ・ デマ ・ イタリアの古典に学ぶ

## ● 著者からのメッセージ 30

## さくいん 31



# 1 日本の疫病の歴史(1)

疫病はどこからか病原体が伝わってこなければ発生しません。

日本では、旧石器時代<sup>\*1</sup>には、疫病のまん延はなかったと

いわれています。でも弥生時代<sup>\*2</sup>になると……。

<sup>\*1</sup> 紀元前14000年ごろ。

<sup>\*2</sup> 紀元前10世紀～紀元後3世紀ごろ。



## もっとも古い結核の痕跡

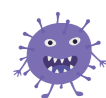
地球上でもっとも古く、もっとも広く分布した感染症は、結核だと考えられています。結核のもっとも古い痕跡としては、紀元前5000年ごろの古代エジプト文明の人骨から見つかります。また、紀元前1000年ごろのミイラにも、結核のあとが認められました。結核で死亡したと思われる人のミイラが、大英博物館に展示されています。

日本ではどうでしょうか。鳥取市には、1998年から2001年にかけて発掘調査がおこなわれた弥生時代後期の大規模な遺跡があります。青谷上寺地遺跡と名づけられたこの遺跡から、大規

模な水田稲作の跡や数万点におよぶ出土品とともに、200体以上の人骨が発見されました。

おどろくべきことに、そのなかに「骨結核」(せきついカリエス)を示す人骨も発見されたのです(右ページ写真)。この発見により、日本に結核菌がもたらされたのは、今から1800年ほど前(弥生時代後期)だということがわかりました。

これは、画期的な発見! なぜなら、それまで各地の遺跡から発見されていた結核の痕跡を残す人骨は、6世紀後半～7世紀前半にかけての古墳時代後期のものだったからです。青谷上寺地遺跡の人骨の発見で、日本に結核がもたらされた時期が、一挙に約400年もさかのぼることになったのです。



画像提供: 鳥取県

青谷上寺地遺跡出土の、日本でもっとも古いせきついカリエスの痕跡のある人骨。

されています(→1巻p11)。このことから、中国大陸から日本に稲作とともに結核菌がもちこまれたのだとも考えられます。



## 水田稲作の発展と疫病の発生

青谷上寺地遺跡からは、田んぼを開墾するためのすきやくわ、稲穂をつみとる石包丁や、大量の米の化石も出土していることから、ここでは稲作がおこなわれていたことがわかりました。

また、船団を組んで海をわたっている絵がえがかれた板も出土しています。大陸のものだとわかる出土品もあるため、青谷地域は、弥生時代には交易の拠点だったのではないかと考えられています。

結核菌が人のあいだで感染をくりかえして生きのこるためには、ある程度の人口が必要です。人びとが定住して農耕をおこない、安定的に食料を得られるようになれば、人口は増えていきます。青谷地域は、その条件を満たしていたのでしょう。

水田稲作の起源地である中国・上海市の遺跡で、約5000年前の結核の痕跡のある人骨が発見



青谷上寺地遺跡から出土した多数の農具や獣骨、玉。

画像提供: 鳥取県



結核のあとが認められた古代エジプトのミイラ。

# 2 日本の疫病の歴史(2)

ここまで見てきたとおり、日本人は江戸時代までは「疫病退散」の願いを未知なる力にゆだねるほかありませんでした。ところが江戸時代末期から明治時代になると人びとは、医学に期待するようになります。

## 西洋医学の幕明け



西洋医学発祥記念像（大分市）。中央がアルメイダ。

日本に西洋医学が伝わったのは、1557年にポルトガル人のアルメイダが今の福井県に西洋式病院を設立したときでした。それから200年以上のあいだ日本における西洋医学の進歩はほとんど見られませんでした。江戸時代中期の1774年、杉田玄白らが『解体新書』を発表し、ようやく西洋医学の幕明けとなりました。

解体新書（内藤記念くすり博物館所蔵）



杉田玄白 江戸時代の蘭学者・蘭方医。若狭小浜藩（現在の福井県の一部）の藩医の家に生まれた。1771年、死刑囚の解剖を見学し、オランダの「ターヘル=アナトミア」という医学書の正しさにおどろき、前野良沢らと翻訳をはじめ、3年半をかけて完成。『解体新書』と名づけ発表した。

がくしよ ただ まえのりつたく ほんやく ねんはん かんせい かいたいしんしよ な ほつぽう かけて完成。『解体新書』と名づけ発表した。

次いで1793年には、宇田川槐園がはじめて西洋の内科の医学書を翻訳し、『西説内科撰書』を発表します。

鎖国をおこなっていた江戸時代において、長崎の出島で交易を許されていたのが、オランダでした。出島にはオランダ商館が置かれ、日本との貿易をおこなうために、商館長ほか十数名のオランダ人が滞在していました。

江戸時代末期（幕末）の1823年、出島に滞するオランダ人の診察や治療にあたる商館医として来日したのが、シーボルト（当時27歳）でした。通常は禁止されていた出島の外に出ることを特別に許可されていたシーボルトは、最先端の西洋医学を学ぼうとする日本人のため、出島の外に医学教育をおこなう「鳴滝塾」を開き、伊東玄朴（→p10）などの蘭方医を育てました。

また、日本の自然や文化に高い関心をもっていたシーボルトは帰国後、日本研究を発表し、西洋における日本理解の促進に貢献したのです。



うだがわかいえん えどじたい 蘭 宇田川槐園 江戸時代の蘭学者、蘭方医。津山藩（現在の岡山県の一部）の藩医の長子として江戸に生まれたが、蘭方医となる。



らいにち わか 来日したころの若きシーボルト。

（川原慶賀 筆）

## 本格的な近代医学教育のはじまり

江戸時代末期（幕末）には、開国をせまる黒船などが来航したこともあり、江戸幕府は国防体制を強化する必要にせまられました。そこで、西洋式軍艦をオランダに発注するとともに、西洋式海軍士官の養成を目的とした「海軍伝習所」を長崎に開設しました。伝習所では、オランダ軍人を教官として、軍艦の操縦だけでなく、造船や語学、医学などさまざまな教育がおこなわれました。

1857年、オランダ海軍の軍医ポンペが医学伝習所の教官として着任します。幕府の医師・松本良順が助手兼学生代表となってポンペに協力し、自然科学を基礎とした体系的な近代医学教育がはじまりました。そこで学んだのは、松本良順のよびかけにより諸藩から集まった医師たちで、ポンペは5年間にわたり1人で教えたといえます。

また、ポンペは医学教育をおこなうだけでなく、1858（安政5）年に長崎でコレラが大流行したときなどには、医者として患者の治療と予防に尽力しました。

ポンペは、医学教育には患者を診療する実地教育が不可欠だと考え、幕府に病院建設を願いでていました。1859年に病院建設が認められると、1861年に長崎郊外の高台に日本初の西洋式

ポンペ（中央右）と松本良順（中央左）、養生所の医学生たち。

（長崎大学付属図書館所蔵）



長崎奉行所西役所に置かれた長崎海軍伝習所。

（「長崎海軍伝習所絵図」 鍋島報効会所蔵）



日本とオランダの国旗がひるがえる、小島養生所。

（長崎大学付属図書館所蔵）

の病院「小島養生所」が開設されました。養生所には医学所（もとの医学伝習所）が併設され、ポンペは患者の治療とともに、実践的な医学教育をおこなったのです。そのため、ポンペは「日本近代西洋医学教育の父」とよばれています。その後、1865年に養生所と医学所は統合され、精得館と改称されました。

# 感染症に立ちむかった3人の 日本人医師

疫病に対し日本人のほとんどが、

護符に疫病退散(→p13)の願いを託していたころから、

北里柴三郎は細菌学の分野で多大な功績を上げていました。後進の指導にも熱心に取り組み、志賀潔、野口英世などの優秀な弟子を育てました。

きたさとしばさぶろう  
北里柴三郎  
(1853年-1931年)



画像提供：学校法人北里研究所

北里柴三郎は、1853年に現在の熊本県阿蘇郡小国町に生まれ、15歳で明治時代をむかえたころには政治家か軍人を志していました。ところが、オランダ人医師の指導を受けるようになり、医学の道を志します。

1874年(明治7)に上京。東京医学校(明治10年東京大学医学部に改称)で学び、「研究は目的の如何に関わらず、実際に役立つ医療・予防の上に結実されるべき」として、病気の診断や治療に役立つ研究に打ちこみました。

東京大学卒業後は、内務省衛生局(厚生労働省の前身)に入省。その後、1886(明治19)年、ドイツに留学。炭疽菌の純粋培養や結核菌の発見などの業績で知られるロベルト・コッホの下、コッホ研究所で研究にはげみました。

留学中の1889年、世界ではじめてとなる破傷風菌の純粋培養に成功。翌1890年には、破傷風菌の毒素を中和する抗体を発見し、ついで「血清療法」を開発します(ジフテリアにも応用)。こうして北里は、世界的にも知られるようになります。

1892(明治25)年に帰国。福澤諭吉らの援助を得て私立伝染病研究所(1899年に国立伝染病研究所となる)を設立。所長として伝染病予防と細菌学の研究に取り組み、翌年には、日本で最初の結核治療専門病院を設立し、結核予防と治療に尽力しました。

1894(明治27)年、香港でまん延したペストの原因調査のため現地におもむき、ペスト菌を発見するのです。

1914年に国立伝染病研究所所長を辞任した北里は、北里研究所を設立し、狂犬病やインフルエンザ、赤痢などの血清開発を続けました。



## もっとくわしく

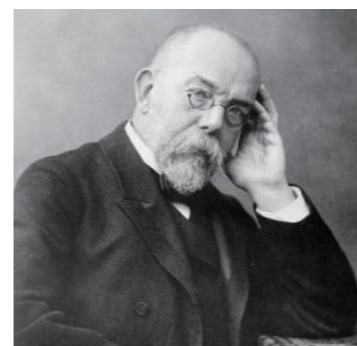
### 血清療法

「血清療法」とは、人工的につくった無毒または弱毒化した毒素を少量ずつ注射して、体内でその抗体をつくることにより病気の治療や予防をする手法のこと。1890年に北里柴三郎とエミール・ベーリングが、破傷風とジフテリアの血清療法の発見を発表したことによりはじまる。

きたさとしばさぶろう  
北里柴三郎  
しゃしんかん  
写真館



破傷風の血清療法確立を記念して。



北里の師でもある、  
ロベルト・コッホ。

愛用の顕微鏡で研究  
をする北里。



1894年ころの伝染病研究所。



創立当時の  
北里研究所。

画像提供：学校法人北里研究所

# 写真で見る100年前と現代

スペインかぜがまん延する100年前の日本のようすは、  
 コロナ禍といわれる2020年の状況ととてもよく似ているのは、  
 24~27ページでくわしく見てきたとおりですが、ここでもう一度、  
 過去と現在のようすを写真で比較してみましょう。

## 1920年のスペインかぜ



(大阪朝日新聞1920年1月15日付)

## 2020年の新型コロナ



(朝日新聞2020年3月2日付)



マスクをつけて登校する女学生。(提供：朝日新聞社)



マスクをつけて登校する学生。



(東京日日新聞1920年1月15日付)



# 5 日本の疫病の歴史から学ぶべきこと

この本の最後は、今、そして、これからの疫病(感染症)対策において  
 気をつけなければならないことを見てみましょう。

## 令和のアマビエ

「疫病封じの妖怪アマビエが令和納豆に降臨！」  
 これは、茨城県水戸市の会社が2020年5月に「アマビエ納豆ばくだんおにぎり」を発売した際のキャッチコピーです。この会社では、この商品を販売して得られた利益の全額を、新型コロナ感染拡大防止の活動支援金として寄付することでした。



これは、13ページで見たアマビエが現代のコロナ禍に出現した実例ですが、このように現代になっても、日本人は疫病退散(→p13)を心のどこかで未知の力にゆだねることがあるようです。

## デマ

医学が発達した現代では、根拠のないデマに振りまわされる人はいないと思いきや、2020年のコロナ禍でも、「新型コロナウイルスには〇〇が効く」「うがい薬が予防になる」といった感染症対策についてのデマから、「トイレトペーパーの入荷が少なくなっている」といったもの、「ウイルス

はアメリカが広めた」などの政治的なものまで、さまざまなデマが飛びかいました。しかも、当初はデマを信じていなかった人も、トイレトペーパーを買っておかないとまずいという気持ちにさせられたといえます。

## イタリアの古典に学ぶ

「外国人への恐怖やデマ、ばかげた治療法。ペストがイタリアで大流行した17世紀の混乱のようすは、まるで今朝の新聞から出てきたようだ」  
 これは、新型コロナの感染拡大を受けて休校していたイタリア・ミラノの高校の校長先生が、イタリアの文豪マンゾーニの『いいなづけ』のなかからペストの流行についての一節を紹介して、学校のホームページで生徒に向けて発信したものの。すると、SNSで世界中に広まり、話題となりました。日本でもテレビや新聞などに取りあげられました。

マンゾーニの『いいなづけ』の第31章には、外国人への恐怖、感染源のヒステリックな探索、専門家への軽蔑、デマ、ばかげた治療法、必需品の盗難などが書かれています。これらはイタリアのことだけではありません。また、17世紀のペストや現在の新型コロナについてのこともありません。世界中で、日本で、同じように気をつけなければならないことです。日本の疫病の歴史から、そして、世界の感染症の歴史から学ぶべきことだといえるでしょう。

